

フロー/ストック

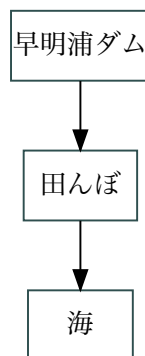
労働経済学 2

川田恵介

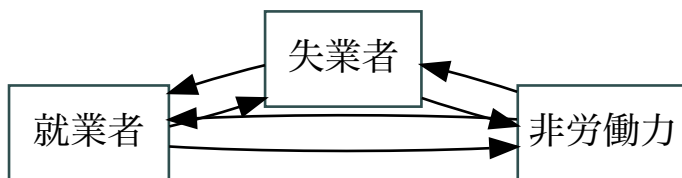
ストック・フロー

- 失業者数、就業者数、非労働力 = “量” についての、ある時点のストック水準を示す
- フローにも注目した方がいい場合も多い
 - 環境変化により敏感に反応
 - 政策介入がし易い

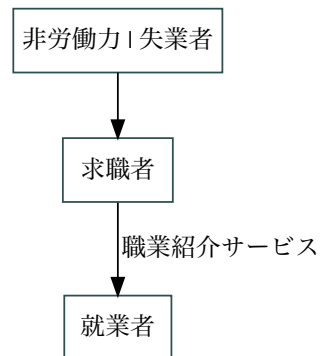
例: ストック = 水面水準、フロー = 流入出量



労働市場のフロー



入職のフロー



公的職業紹介

- [ハローワーク](#)
- 業務上で収集されたデータ（業務データ）が毎月報告されている
 - [職業安定業務統計](#)
 - 新規就職件数（入職者数）、（有効）求人数、（有効）求職者数などが報告されている
- 特に有効求人倍率は、景気動向の先行指標として注目される

調査データ VS 業務データ

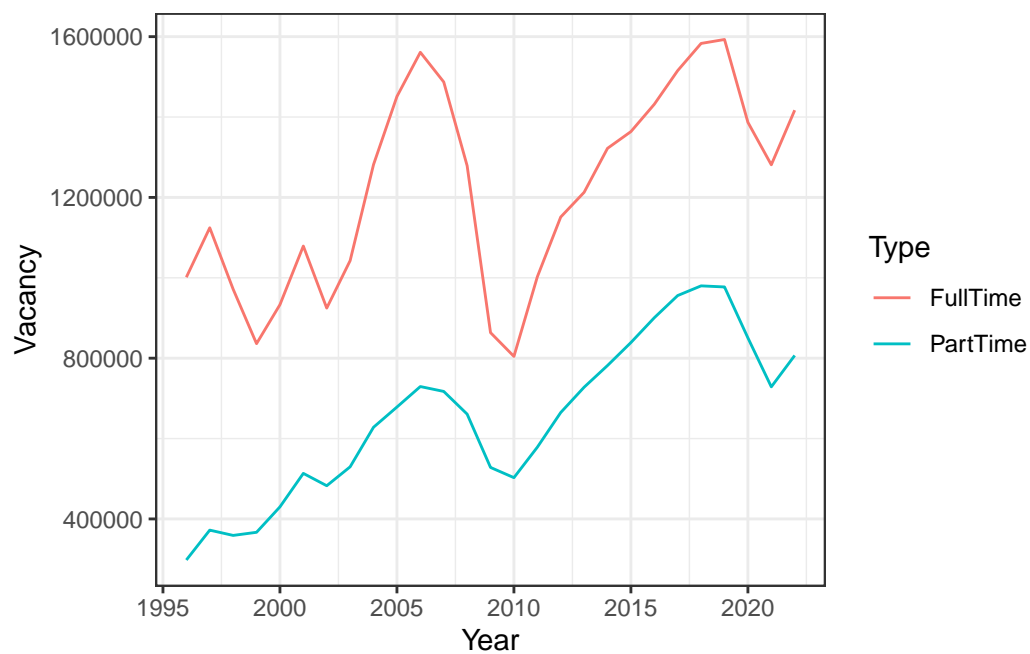
- 調査データ：調査そのものを目的に収集されたデータ
 - 調査目的を果たせるようにデザイン
 - コストがかかり、サンプリング調査であることが多い
 - 真の値との間に、誤差が生じる

- 業務データ: 業務上の必要性から収集されたデータ
 - 全数調査
 - 本来の調査目的とは乖離

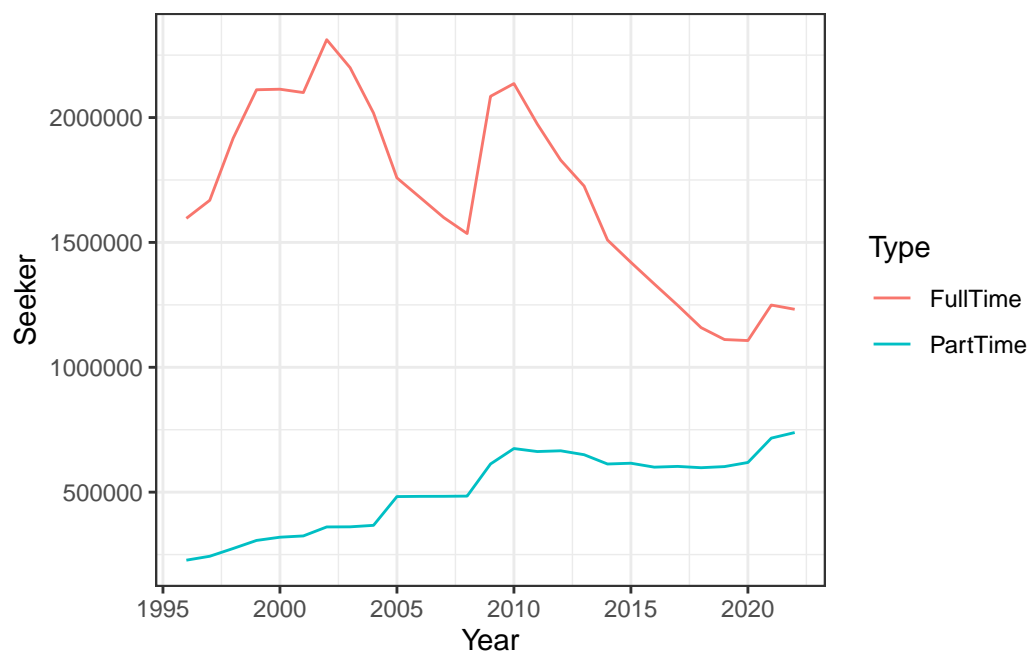
入職者数 (3 月)



有効求人件数 (3 月)



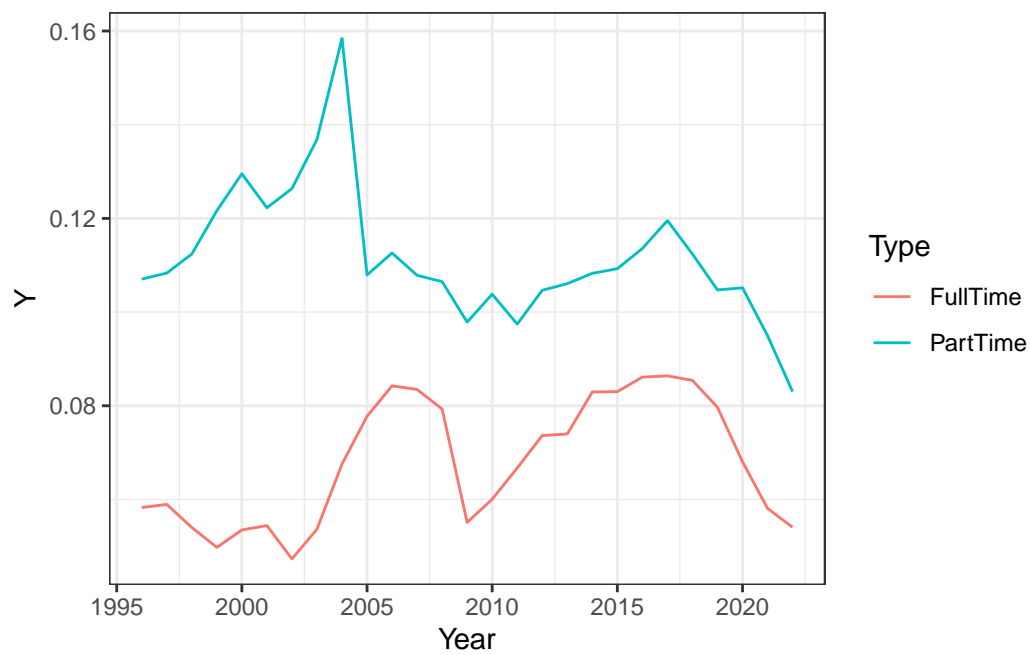
有効求職件数 (3 月)



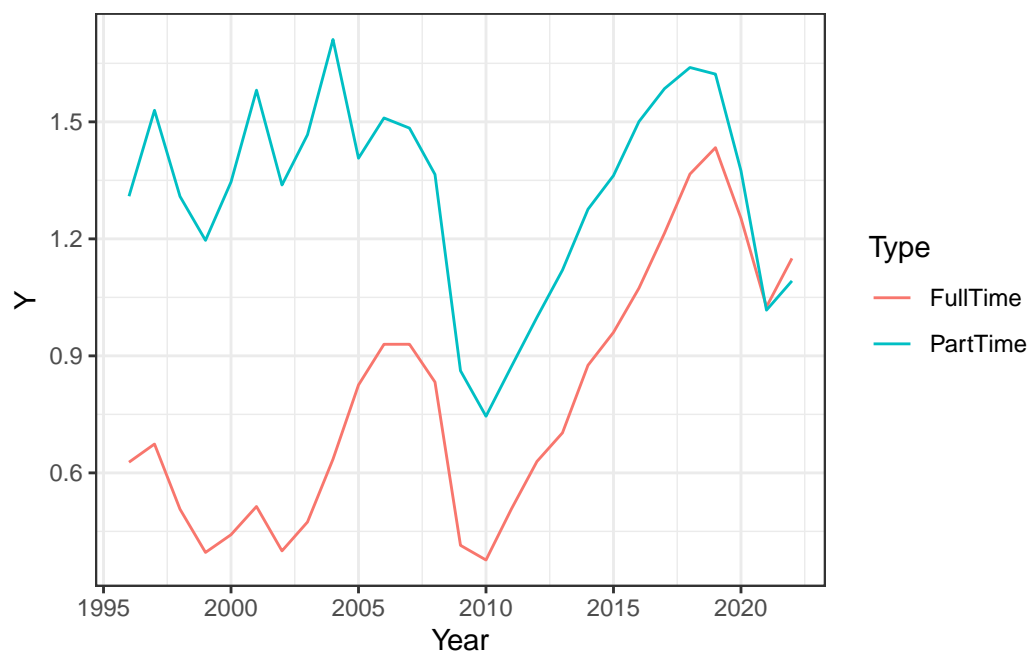
率への変換

- 失業者数など比べても、解釈が難しい
 - 求職者数、求人数の変動も大きい
- 率への変換
- 入職率 = 新規就職件数/求職件数
- 求人倍率 = 求人件数/求職件数

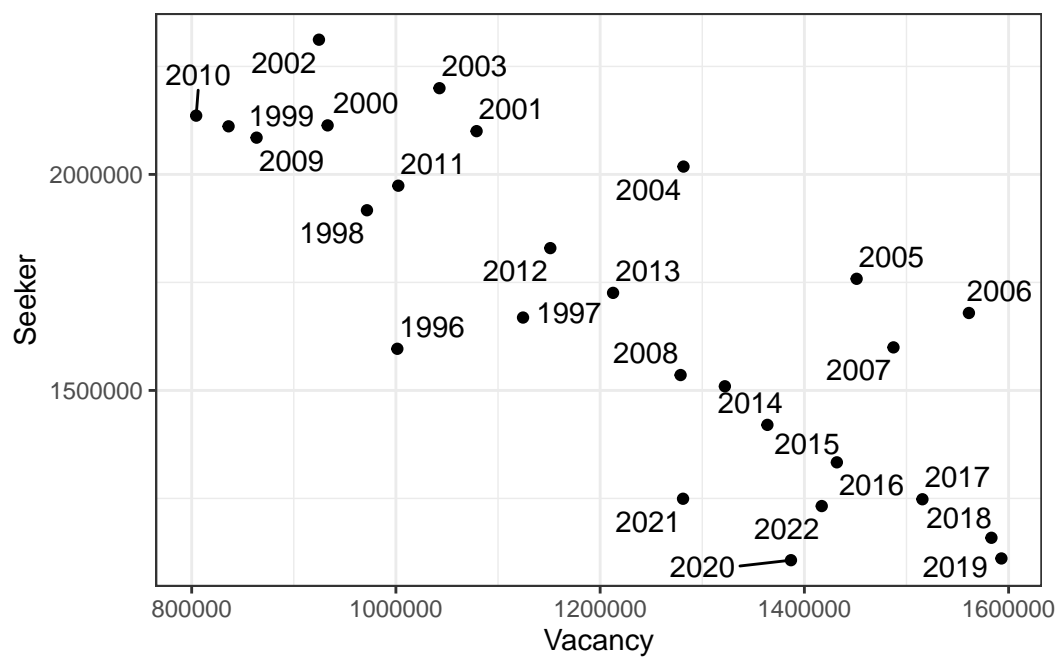
入職率 (3 月)



求人倍率 (3 月)



求人・求職 (3 月)

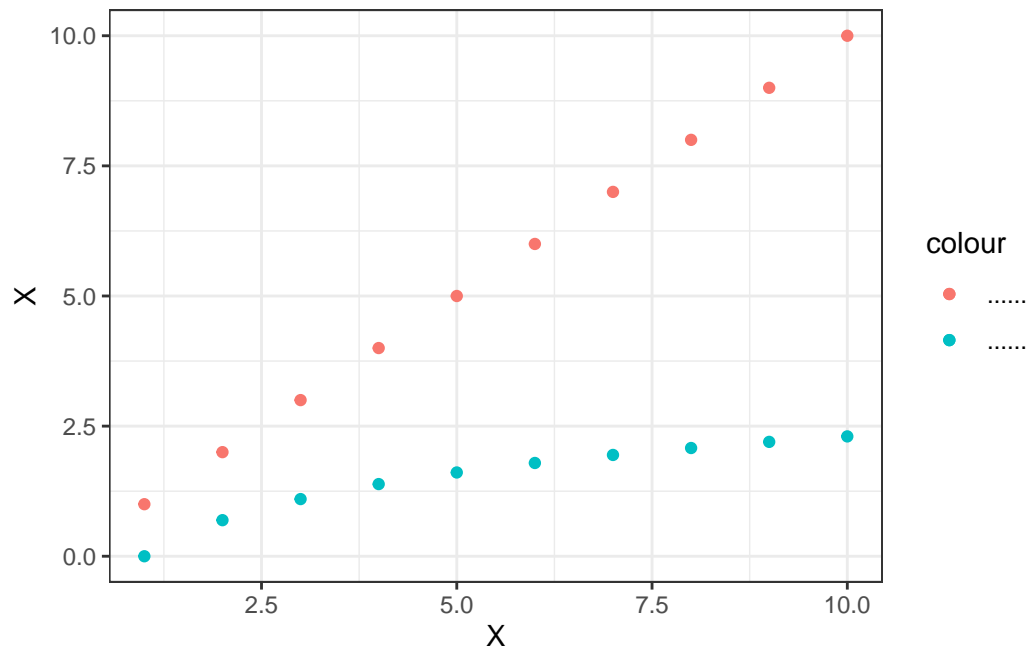


経験則

- “経験則”として、求人数と求職者数には安定的な”負”の関係があることが多い
 - － ビバレッジカーブ

$$A = \text{失業者} \times \text{求職者}$$

付録: 対数



なぜビバレッジカーブが成り立つのか

- 多くの理論研究
 - － 求人が増えると、入職が容易になり、求職者が減る
- 理論上は逆の動きも予測しうる
 - － 求職者が増えると、求人活動の利益が高まり、求人が増える

とにかく失業者を 0 にすべき？

- なぜ失業者が発生するのか？

- － 需要不足: 景気悪化などによる労働需要の減少
 - － 構造要因: 失業期間を含む転職活動、非労働状態からの労働復帰
- 需要不足のみならば、0 にすべきかも
- 失業者は、どんなに景気が良くても存在
 - － 構造要因の存在

“過小” な失業

- 「仕事をやめ、職探しに集中したくてもできない社会」
 - － “転職しにくい・非労働状態から復帰しにくい”
 - － 労働需要の大きい企業への労働移動の阻害
 - － 雇用の”質”の低下

政策研究

- “実務家”に”政策”を提案: 経済学の主目的の一つ
 - － 「～である」(事実命題)のみならず、「～すべき」(規範命題)を議論する必要がある出てくる
 - － 極めて難しい
- 例: ヒュームのギロチン「事実命題のみからは、規範命題は導けない」
 - － 「多くの人が信号を守っているので、信号を守るべきだ」
 - － 「多くの人がゴミを早く出しているので、早く出してもいい」

現実的なライン

- 主張の透明性の確保
 - － 何を”政策変数”としているのか?
 - － 何を”良し”としているのか?
 - － 何を(政策的に操作できない)構造とするのか?

適切な失業者の水準

- 多くの議論

- 古典的には自然失業率など
- Michaillat and Saez (2022) : 以下を想定
 - 政策変数: 求職者数
 - 目標: マッチング活動に従事する労働者数を最小化
 - 構造: ビバレッジカーブ・求人に必要な労働者数 $= a$

最適化問題

$$\min u + a \times v$$

$$\text{subject to } A = u \times v$$

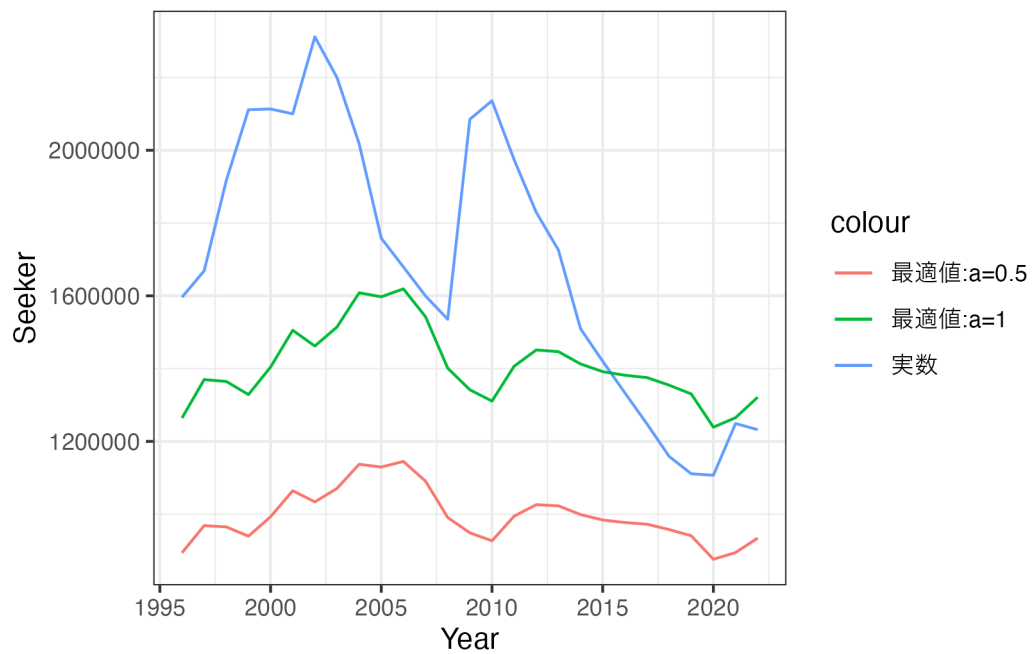
$$u^2 = \sqrt{a} \sqrt{uv}$$

答え

- 適切な水準 u^*

$$u^* = (a \times u \times v)^{1/2}$$

求人・求職 (3 月)



引用

Michaillat, Pascal, and Emmanuel Saez. 2022. “ $U^* = u \vee v$.” <https://doi.org/10.3386/w30211>.